

四旬節第五主日 2017.4.2

ラザロの生き返り

ヨハネ福音書 11章 1-45節

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をめぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。

それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」

(中略)

さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。

マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世

に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかつたのか」と言う者もいた。イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」

こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。マリ

アのところに来て、イエスのなされたことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。

説教

ラザロ危篤の連絡を受けたイエスはすぐに見舞いにかげつけることなく、なおも二日間とどまり、三日目にラザロのもと、マルタ、マリア姉妹のもとに赴（おもむ）きます。すでに葬られたラザロを前にしてみんな泣いています。イエスも泣きます。しかしイエスの呼びかけに答えて死人のラザロは墓の中からでてきます。この出来事を目撃した人たちはイエスを信じました。長い朗読でしたが、要約するとこんな感じになります。それにしてもたましいに染みいる福音をだいなしにしてしまうので、短くまとめるのは毎度のことですがあまり気が進みません。

60代の婦人が不幸な出来事をきっかけにゴミ屋敷の主となってしまいました。子どもや周囲の支えで立ち直ることができました。ちょっと意味合いはちがうのですが、わたしも一日のうちに何度か「死にたい気分」になります。そんな時、罵りのことばを吐く前に「マイゴット」というように心がけています。うまく神にすがりつくことができると、なんとかのりきれた気分になります。私としてはこまかく死と復活をくりかえしているつもりです。そんなわけで実感としてゴミ屋敷のご婦人の気分はわかります。

このニュース『ゴミ部屋 SOS を』（毎日新聞3月5日）を紹介して今日の福音の感想が「黙想センターせせらぎ」のホームページにありました。

以下せせらぎの黙想のヒントから引用します。 <http://seseragi-sc.jp/xe/346499>

（前略）「あっ、彼女は復活した」と思ったのです。人は、何かのきっかけで躓いたり、落ち込んだりと、【負】の渦の中に入り込むことがあります。イエスは「わたしは復活であり、命である。私を信じる者は、たとえ死んでも生きる。」と言われます。私たちにとってこのイエスの言葉は、どのように響いてくるのでしょうか。私たちにとって【復活】とは何なのでしょう。【復活】は、ただ単に死からの

「蘇り」ではない、と言ってもいいでしょう。私たちが日常生活の中で陥っている【負】から【正】へと変化して行くことも【復活】と言えるのかもしれませんが、私たち一人の力では難しいかもしれませんが、周りの愛情、「何とか助けたい」という気持ちを受けながら変わって行く喜びを感じることができるとのことでしょう。イエスは、いつも私たち一人の中におられ、ご自分の命を与えてくださっています。私たちは、イエスのみ言葉を信頼して、まず私たち一人ひとりが「変わる事、【復活】すること」の喜びを味わうことができればいいですね。

きのうテレビニュースをみていたら、先日、雪崩にまきこまれ命を失った高校生たちの弔いに山中にもうけられた献花台の前で弔いにきていた男性が写っていました。冥福を祈るために来た取材に答える男性の姿を見て、こういう人の行いがあるのでひどい出来事、世の中も救われるのだなあと感じました。わたしはコタツにあたってテレビを見ているだけなのに、寒い山中に出向いて弔う人がいるのだということに救いを見たような気がしました。今年4月16日が復活の主日、イースターです。あと二週間ほどありますが、主の復活を想い、主の守りの中で日々を過ごすことができますように。
